

# 信念と実行の人

竹入義勝

ダブル選挙の最中、六月十二日の早朝、東京からの連絡で、私は大平さんの訃報を知った。

大事に至らなければと思う矢先のことであり、おどろいた。おもえば、外遊、党内政権抗争、そして内閣不信任案の可決、解散・ダブル選挙へと、めまぐるしく動いた政局運営のなかで疲労困憊は極まっていたのであろう。

その影響を受けてか、選挙情勢は大きく揺れ、十日後の開票結果で、私どもは敗北を喫した。当時、私は、大平さんの魂魄がこの世にとどまって、日本列島の隅々まで駆け巡ったかの感を強くしたものだ。

私の大平観というか、敬意を表してやまないところは、一つには、約束したことを必ず実行しようとする姿勢であり、二つには、大平さんは物事に慎重だけれども、その判断は的確であったことである。日中国交回復の折、私は大平さんとヒザ詰めで話し合ったが、これがその時の率直な印象でもあった。

一九七二年（昭和四十七年）七月二十五日、私は中国へ赴いた。日中国交正常化の条件について、当時の周恩来総理と忌憚のない話し合いをするためであった。もとより私は、政府特使ではない。ただ、日中国交正常化のために、日本国民の大半、大多数が考えるところを持って周総理の胸をたたいてみよう、こう思ったからに他ならない。しかし、わが国政府、さらに自民党の本音がどこにあるのか、全く不明のままでは話し合う意味も半減してしまう。そこで、出発前に当時の田中首相と外務大臣であった大平さんと会談した。特に大平さんとは、回を重ねて日本としての条件について率直に話し合った。

そして、八月三日夜半に帰国した私は、翌日、首相官邸に首相と大平さんを訪ね、周總理が示した日中国交正常化の共同声明中国側草案を渡した。大平さんは、私とは対照的な、あの目を一段と細め笑みを浮かべて、私のメモをポケットに入れた。後刻、大平さんは私に「竹入さん、あとは首相の決断だけだよ。決断したら私は外務大臣として万難を排してやる。奮つよ」と明言した。それから二カ月を経ることなくして、大平さんは、田中首相とともに北京へ向けて飛ぶ特別機の人となり、約束は実行された。

私は元来、国の外交にあつては与野党の間で百八十度異なる対決姿勢に終始してはならない、国民の生命と財産を守り、国益を守る見地から、とことん話し合つて合意点を見いだし、その実行には与野党が力を合わせるべきだという信念を持つている。この時を契機に私のこの考えは強まっている。

話題をかえたい。

昭和五十四年十月の総選挙で自民党が大敗した後、大平さんは、本気で「連合」を考えていたと思う。もとより、こうした問題は簡単に話が一致するような性質のものではない。

その当時、私の受けた印象は、大平さんがこれまで口にしてきたパーシャル（部分）連合よりも、奥深いものを胸に抱いていたような気がしてならなかった。

大平さんの特徴は、「待ち」の手法に徹した「現実的政治」であつたと思う。しかし、私は、そうした大平さんと話しているなかで、慎重さのうちにある判断的確さを垣間見たのである。

大平さんについて私の想い出は、まだまだ尽きない。しかし、今はただ、卓越した大平さんの死を惜しみ、ご冥福を祈るものである。

（衆議院議員・公明党委員長）